福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

教師の力量形成と紀要編集の関係：協働の中で生まれるアイデンティティ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-05-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 牧田, 秀昭 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/5612

教師の力量形成と紀要編集の関係
－協働の中で生まれるアイデンティティ－

牧田　秀昭

1　はじめに

(1) 至民中学校の学校改革の背景

福井市至民中学校は「異学年型教科センター方式」として移転開校して 3 年目になる。受験や生徒指導に傾倒している現在の中学校教育を，本来の学びが行われる『学び舎』へ転換していこうと，様々な学校改革を進めてきた。

そもそもの改革の背景は，私が目撃した着任当初の生徒と教師の姿にある。人なつっこい生徒たちは，部活動には人一倍頑張るものの授業中は突っ伏している姿が多く見られ，頭は上がっていてもただひたすら板書を書き写しているだけである。数々の生活上の注意点が教師の方から提示され，違反するようならば厳しく指導される。テストの点数が悪い生徒や宿題を忘れた生徒は「残し」になり，その数も後を絶たない。次々と基準を打ち出しては，こぼれ落ちてくる生徒を個人指導する繰り返しに終始する。

教師たちも力のある面々が顔をそろえていたが，力の入れどころは部活動や受験指導，学年の生徒指導であり，教科の指導に熱を入れているとは全く言えないものであった。もちろん，個人的に教材研究は進めていたのであろうが，私の目にはそのように映ってこなかったというわけである [1)]。

細かい注意や指導に明け暮れて根本的に変化のない状況を打破するために，そして生徒が生き生きと学ぶ学校にするために，教師は職責の本分と言える授業づくりに力を入れて，学びの世界に生徒を取り戻すことが求められるであろう。しかし，頭では分かっていても，実際には授業が最も後回しになってしまう現状がある。至民中学校の学校改革はこの問題を解決すべく進められてきた。

(2) 移転開校 3 年目としての新たな課題

70 分授業を始めて（本格的に授業改革を始めて）5 年目，移転開校して 3 年目ともなると，新たな課題が生まれてくる。授業改革当初，移転開校当初の「気概」が薄れていくと同時に，教職員の異動は避けられず，新たなメンバーで進めていかねばならない。すなわち，新しいものを創造し続けることと，これまで構築してきたことを継続していくという矛盾したことを同時に行っていかねばならないことに直面していることになる。動いていくことをやめればマンネリ化となり，授業や学校運営から命が消える。我々が大切にしているのは「共通のビジョンを持つ」ことであり，「同じことをする」ことではない。

この課題を解決する大きな手がかりとして「研究紀要」の存在が浮かび上がる。思い起こせばここ数年間で，本校の紀要は大きな変遷を遂げた。変遷に関わる諸要件を解明し，教師の力量形成とどのような関係があるのか，これからの紀要が果たす役割の可能性は何かまで論究していきたい。

2　紀要の変遷

(1) 一般的な研究紀要の内容

研究紀要には，次のような記述と役割がある。

①学校の全体研究概要

教育研究目標や重点目標，研究主題とその設定理由，全体計画，研究組織の構成，研究の進め方等，研究活動の核となる部分であり，ほとんどの学校の紀要にはこの部分が記述されている。公開研究会や指導主事訪問では大抵はこの部分がまず示される。

②全体研究の結果報告

開催した全体研究会や各部会の開催日時とテーマ，そして1年間の成果と課題がまとめられる。この形式は，仮説・検証型を採る学校や，顕著な事例を挙げて論述している学校，全てを各研究組織の記述に委託している学校等様々である。

③部会の記録

各教科や各部会等，学校の実状に応じた形でまとめられている。大抵は各組織の部長によるが，部会のページの中に個人分担されている学校もある。行われた研究授業の指導案やその後の研究会での考察，教科や部会として取り組んだ方策と事後アンケート等が記述されている。②③④がまとめられている学校もある。

④実践記録

個人の実践記録は，その扱いが最もバラエティに富んでいる。個人研究論文の投稿の場となっているもの，代表で数名（学年で1名とか教科で1名など）が記述しているもの，指導案と事後アンケートや生徒感想のみで，実際の子どもの姿が見えないもの（これは実践記録とは呼ばないのかも知れないが）等様々である。

(2) 特徴的な研究紀要の比較

本校が中学校であることから，典型的な幾つかの中学校の研究紀要を紐解き，独自性を読み解きたい。

【愛知教育大学附属岡崎中学校[2)]】

毎年10月に行われる同校の生活教育研究協議会の時に発行されている。従って，研究協議会の指導案や会場案内も含めた冊子となっている。『次代を創る－学びを深め合う授業の実現から－』というタイトル通り，「学びを深め合う中で，新たな自分を創り続ける子ども」を育てる，という観点で一貫している。紀要の中心を占めるのは教科の実践記録で，各教科で，学校の研究主題を受けとめ，具体的にカリキュラムと授業実践例にまとめられている。

数学科を例にとると，最初に数学科がはぐくむ「次代を創る主体」の基盤として，「事象を数学で見つめ，論理的に解き明かしていく姿」とまとめている。さらに数学の学びについて，事象との出会い，問題意識の共有，問題の解決（論理的な思考のよさの実感）を柱として図示してある。特徴的なのは次に繋がる「3　カリキュラムを創る」の章である。3年間の学びのカリキュラム編成について，特に数学科では，単に単元名と内容を提示するだけでなく，単元を解いて学びの課程を3つのカテゴリーから考え，カリキュラム編成上の基本的な考えを述べている。それらは子どもの姿で著されている。

実践例は数学科では2つ掲載されており，3名いる数学科の中で主任が教科の総論を述べ，他の2名が実践を紹介していると想像できる。1つの実践が全ての教科で4ページにまとめられており，教師から提示された課題を解決していく過程を，1人の子どもの眼差しから記述されている。授業観察と，授業日記，単元まとめを元にして，授業者が授業の筋を再現している。

当然のことながら授業は生徒の活動，学びの様子が捉えられるような構造になっており，全教科で3年間を通して行っていることから，同校の教科の授業に賭ける熱意と，教科会の充実ぶりが伺える。

【東京学芸大学附属竹早中学校[3)]】

同校の研究紀要は論文集である。学校長の巻頭言でも『本紀要（論文集）は，この「授業研究」の記録であり，成果といってよい。みずからの励みとしたい。』と結んでいる。論文は6本で，章立ても個人に任されている。

数学科の論文[4)]は空間認識力の育成に向けた実践記録である。教材開発と教材研究に力点が置かれており，授業

の流れと，毎時間の子どものワークシートと感想により，教材の有効性を立証しようという記述スタイルである。単元そのものは多面体を作成することを軸とした総合的な扱いで，製作することから生まれる疑問を徹底的に追究する，難度の高い教材となっている。

研究部活動報告では，研究主題「主体性と育む幼小中連携の教育～実践に基づく連携カリキュラムの構想～」は示されているものの，内容的な説明はなく，幼小中連携研究の足跡（校内研究会や連携委員会の実施日程）が掲載されている。前述の論文との直接の関係性は見つからない。

平成 21 年度実践報告は，各教科の学習指導案（教科によっては事後の研究会の議事録も含む）が列記されている。

教科の授業研究に重点が置かれているのは十分に感じることが出来るが，教科会での共通理解，あるいは全体研究の方向性は，この紀要を見る限りでは見つけられない。

【福井市明道中学校[5)]】

『「確かな学力」と「豊かな心」を育む授業づくり～聞き合い，練り合い，学び合う集団～』の研究主題の元，実践研究のテーマ『“聞き合い，練り合い，学び合い，伝え合う”協働的（グループ）活動の実現をめざして－『知的楽しさ』……習得から活用へ－』が大々的に謳われ，学校の課題を全校挙げて解決していこうという強い意志が感じられる。総論では主題設定の理由や研究経過が述べられ，具体的には 3 つの各部会の実践の項で紹介されている。

中心的内容を占める「学力づくり部会」では，上記のテーマがそのまま掲載され，研究の視点や研究の進め方が示されている。これに従い，各教科毎に教科の経営案として，Ⅰ研究計画とⅡ研究実践が続く。

例えば数学科でも学校の全体テーマに従って教科の実践研究テーマ「生徒一人一人が目的意識をもって主体的に取り組み，数学を学ぶことへの意欲を高める数学的活動が行われる授業展開の工夫」が決められて，設定理由を解説している。実践紹介では著者を明確にして 1 人 2 ページで 4 人がまとめている。ここで語られているのは，指導案と事後の考察と課題である。興味深いのは 4 本の内の 2 本の指導案が同じであったことである。教科会で協働で課題を作成したのであろうが，実践として掲載するということは，全員の実践を掲載することを重視していたのではないかと推察する。

【福井市進明中学校[6)]】

研究主題『主体的に学ぶ生徒の育成－協働的な学習の場がある授業（活動）づくりを通して－』の設定理由や計画，経過，成果と課題がまとめられた後は，各部会の報告に入る。各部会はまたそれぞれ教科，学年，その他（生徒会，道徳，人権）に別れている。

数学科では研究の概要が 1 ページにまとめられ，テーマに迫る具体策が記述されている。実践記録も 2 本が各 1 ページ紹介されており，職員はどこかの部会で，1 ページの報告をしているようである（全て執筆者が明らかになっている）。単元のねらいと実際，省察がコンパクトにまとめられている。

このように，前述の①から④をどのように組み合わせるかによって，紀要の独自性が形成されている。愛知教育大学附属岡崎中学校のように，子どもの学ぶ姿を追うことで検証していくスタイルは，本県では福井大学教育地域科学部附属中学校[7)]に見られる。理論を振りかざすのではなく，子どもの学びの中で得られた知見を大切にして職員で練り合いながら，学校文化としているのである。

2 番目に紹介した東京学芸大学附属竹早中学校のような論文形式の研究紀要は，県内には見あたらない。協働して学校文化を育むのではなく，個人の力量形成に力点が置かれている。

3 番目，4 番目に紹介した福井市明道中学校，福井市進明中学校のような形式が福井県内ではほとんどである。全体研究の歩みと研究組織を紹介した後は，それぞれの部会毎の報告による。共に実践の報告者が明記されており，全職員参加の体勢が採られている。（発行していない学校や隔年発行の学校，全員の実践記録が掲載されていない学校も多い中にあっては，整っていると言って良い。）ただ，どちらも 1 ページという制約があり，子どもの学びの姿の筋が追われているわけではなく，あくまで教師サイドで著されており，文字通り「報告書」となっている。また

2 校に共通するのは「中学校区教育[8)]」の報告がなされている点である。福井市の教育方針に対応した研究実践の報告書ともなっている。

完成した紀要が誰に読まれているかということも，出来てきた過程と関係が深い。学校で読み合って練り合って発行された紀要は，学校文化の証として教科を越えて広く読まれる。対して論文形式，あるいは担当者で分担執筆し，校内で練り合いが無いものについては，個人的な一論文，一実践として読まれるに止まることが多いという実態がある。

(3) 至民中学校研究紀要[9)]の変遷を辿る

至民中学校では，毎年研究紀要を編集しているが，その変遷の歩みを解説する。

【平成 16 年度研究実践録】

研究の概要として，研究主題『基礎・基本の確かな定着と，生きる力の育成』とその設定理由，研究組織（授業研究部と総合的な学習研究部）と研究会等の実施状況が記述されている。指導主事訪問（年間 2 回），校内研究授業（年間 2 回）の準備やその研究会が主な活動内容である。授業研究部は『基礎・基本の確かな定着をはかる指導工夫～自己表現力を育てる～』を研究課題とし，アンケートを集計して分析している。また，各教科 2 ページずつ，自己表現力を育てる取組の実践例が挙げられている。総合的な学習研究部会も『主体的で創造的な学びを目指して』という研究課題を設定し，各学年の取組を紹介している。

全体として「報告集」の体裁を成し，当時の福井市の研究紀要として標準的な編集が成されている。基本的に分担執筆で，執筆者の記名はない。数学科のページには，具体的な授業場面のことは記載されておらず，自己評価表への記述方法や一般的な場面や課題の工夫について述べられている。授業研究会の実施回数や実施状況を見ても，研究は研究，普段は普段，という印象が強い。

【平成 17 年度研究紀要】

この年に筆者が至民中学校に異動となる。第Ⅰ部研究概要として研究主題『確かな学力と豊かな心の育成』とその設定理由，研究組織，研究の経過，成果と課題，さらに 3 つの研究部会（授業づくり部会，学級づくり部会，心づくり部会）のそれぞれの活動報告が，それぞれの部長によってまとめられている。大きく変化したのは第Ⅱ部で，全員の授業実践記録が掲載されている。執筆者名を明記したのもこの年からである。

この変化は，授業づくり部会（筆者が部長）がもたらしたもので，授業公開は 1 人年間 2 回以上，参観者は参観記録を書き，年度末に実践記録を執筆することを提案したのである。実践記録は 1 人 2 ページ以上で，「学びの実際」と「実践を振り返って」の 2 項目。これは，事前の教師の構想を記述するのではなく，実際の生徒の姿から実践を振り返ろうという表れである。なるべく 1 時間のみでなく，問題解決型学習のひとまとまりを書くように奨励していたが，実際は 1 時間の実践が多い。しかし，全員が子どもの学びを書くことを始めたという意味で，紀要が大きく転換した年度となった。

【平成 18 年度研究紀要】

この年から筆者が研究主任となり現在に至る。この年から 70 分授業を導入し，問題解決型学習をメインに，本格的に授業改革に移ることになる。紀要の枠組みは，前年度と同様，Ⅰ研究概要と，Ⅱ実践記録である。全体研究概要はこの年から，組織や研究経過の表や箇条書きをやめ，全て文章で綴ることにした。70 分授業の導入やそれに伴うカリキュラム研究，教師の力量形成に向けた取組に，context をつけたかったということと，実践記録を執筆する際，表形式にならないように，という意図がある。また，2 つの文献から引用をしているのも，実践記録にもどんどん他の文献を参考にしてもらおうという配慮である。

部会は授業研究部会のみで，ⅠⅡⅢを組織。それぞれが研究課題を持ってはいるものの，授業について教科を越えて語り合おうという主旨である。それぞれの部長により部会の報告が成されているが，特筆すべきは，Ⅰ部会は部会員の校内研究授業を例に挙げて，Ⅱ部会は部会員の実践記録の中から引用して，それぞれ具体的に問題解決型学習についての知見を述べている点である。これにより，普段の授業や実践記録の持つ意味が変化していくのである。

【平成 19 年度研究紀要】

基本的に前年度とスタイルの変更はない。研究概要は益々箇条書きや表形式は排除され，各授業研究部会のまとめも実践記録から抜粋して述べられている。授業研究部会の他に，この年から運営部会が組織されて，重要な学校運営に部会組織で全員が関わっているのであるが，紀要の中では触れられていない。あくまで授業が中心である。

【平成 20 年度研究紀要】

異学年型教科センター方式として移転開校した年度。研究主題は『学びと生活の融合－異学年型教科センター方式を運営する－』となり，表紙に記載されている。研究概要には，全体研究概要，授業研究部会報告の他に，運営部会ＡＢＣ[10]の 3 部会の報告が加わり，単なる授業研究だけでなく，学校の運営研究を総括する紀要となっている。また，関連新聞記事や，来校者一覧，論文投稿等の記録も掲載し，記録誌の意味も持たせるようになる。実践記録は教科だけでなく，Ｃタイムについても掲載するようになった。次年度の大きな足がかりとなっている。

山下校長の「発刊にあたって」は，研究紀要を書き続ける意味を明確に表しており，現在も私たちの心の拠り所となっている[11]。

【平成 21 年度研究紀要】

基本的構成は変更無い。前年度より学校運営記録誌の意味合いを持たせるようになってきているが，その延長として，この年の公開研究会でのペンティ・ハッカライネン氏[12]の講演記録を掲載している。実践記録は，この年度より，「要約，はじめに，学びの実際，実践を振り返って」の枠組みとなる。1 時間単位の記録ではなく，単元を通した実践が増えてきて，学びの実際を記述する前に，カリキュラムの概要を解説したいという要望が増えてきたためである。

(4) 変遷を総括する

決して論文集でなく，また，部会の報告で終始するのではなく，実践記録を記述することで生徒の学びの姿を辿ることを中心に据えている。また，他の福井市の研究紀要に見られるような，学校運営研究全体の報告書，記録書の性格も兼ねてきている。記述していく中で，学校全体のビジョンを共有し，教師の力量形成に着実に貢献している，至民オリジナルの研究紀要へと変遷していると言えよう。

	研究概要ページ数	実践記録ページ数	実践記録本数	1 本当たりページ数	参考文献が記載された実践記録数
平成 16 年度	７	４３	０	０	０
平成 17 年度	２０	６７	２２	３．０	１
平成 18 年度	２０	８５	２２	３．９	２
平成 19 年度	２０	１２５	２１	６．０	７
平成 20 年度	４９	１８４	２７	６．８	１０
平成 21 年度	５７	２３２	２８	８．３	１４

最も特徴的なことは，上表に見られるような，実践記録の充実である。書き方については毎年確認しながら進めている[13]ことや，後述する教科を越えて実践を読み合っていることが大きな要因と言えるが，全体研究概要との関係も見逃せない。個々によって著された実践記録を元にして，各授業研究部会のまとめで具体的に採り上げ，全体研究概要で意味づけしていく（全体研究会で行ってきた他文献の引用や新しい学び方の追究等）ことを繰り返すことで，螺旋的に年々レベルが向上していくことが見てとれる。また，箇条書きや表形式からの脱却についても，まずは全体研究概要で示すことにより，スムーズに移行してきている。

３　紀要を支え，実践を支える

このように，至民中の研究紀要が変貌を遂げてきた裏には，日々の実践研究の中での紀要を支える仕組みが幾つか存在する。そもそも一般的教員は，授業実践を「書く」ことに慣れていない。至民中に赴任して始めて経験する

のである。そのギャップを埋め，書くことの意義を実感していくプロセスのパーツを紹介する。

(1) 同僚の授業を参観記録に表す

平成 17 年度より，問題解決型学習を推進してきた。同時に，教科を越えて普段の授業を公開し，さらに参観記録[14]を書くことを提案した。まず授業公開であるが，普段の授業であるので特に指導案を用意せずとも気軽に公開し，手の空いている教員が見に行く，という形式をとった。生徒の学びの姿を追うことを共通理解していたので，教科を越えても参観できるし，むしろ生徒の目線で授業に参加できるので好都合である。また，公開授業があったら授業研究会を開催するべきであるが，なかなかその時間がない。もちろん時間があれば日常的に話が出来る越したことはないが，最低ラインとして参観記録を用意したのである。

まず公開する側からいえば，指導案は提示する必要はない普段の授業でいいというものの，やはり「公開します」と名乗りを上げるわけだから，講義形式というわけにはいかない。何らかの生徒が活動する場面を授業に盛り込もうとする（結果的に，この動きが「至民式問題解決型学習」となっていった。）。この普段の準備が重要なわけである。

さらに大きなねらいは参観者側にあった。参観者側は少なくとも公開者側よりは気が楽である。ところが授業事実を記述するというのは意外と難しい。視点としては「全体の印象はいらない」「子どもの学びの事実から」といったように，実践記録を書く要領と同じである。したがって，これまでのように教室の後ろの壁にもたれて漠然と眺めているわけにはいかなくなった。あるグループやある生徒の動きを追い，どのような学びが展開されたかを推測する営みは，まさしく自分の授業で生徒たちの学びの姿を見つめ，その場で最善手段を選びながら授業を進め，終わったら実践記録にまとめることと同型である。また，この記録は教員の共有フォルダに上書きされていき，誰でも読むことが出来る。極端に言うなら，参観者の授業観や教育観が白日の下にさらされることになる。書きながらベテランの教員の授業の見取りを学習し，また別の授業を見る，ということが繰り返されるわけだ。

参観した授業についてどれだけでも語れる人が，そのまま的確な参観記録を書けるとは限らない。話すことと書くことは同値でないことを経験していくのである。

(2)『学び舎』で自分の授業を書く

授業内容を書き表すシステムに，企画開発委員会[15]通信『学び舎』がある。Ａ４版 1 枚に具体的な授業実践内容をまとめて，地域，保護者に配布する。本校ホームページにもアップする。平成 19 年度から始め，もう 4 年目になり，毎年 1 人 1 回は発行するようにしている。

この通信の目的は，教育関係者だけでなく，保護者を中心に広く本校の授業内容を広報することにある。そのためには，授業内容と授業の意義を，例え専門的な内容であっても誰でも理解出るように，簡潔に平易に示す必要がある。ここに，(1) とは別の思考経路が発生するのである。

また，原稿は，授業研究部長，研究主任，教頭の目を通される。その間に，「教師からの課題は簡潔に述べるとどういうことか」「生徒の一番の問題意識は何か」「最も伝えたい学習内容は何か」といったことが問われ，推敲される。この営みの中で，実践記録にまとめる上での欠かすことのできないポイントを理解していくのである。

学び舎　福井市至民中学校　企画開発委員会　通信
平成22年5月19日発行　No.2

マイナスとマイナスをかけるとどうなるの？　（1年数学科）

（－2）×3　　＝？
　2　×（－3）＝？
（－2）×（－3）＝？

これらの結果がどうなるか、なぜそうなるか、具体的に説明してみましょう。

「マイナスとマイナスでプラスだ」なんて覚えてしまっている大人の人も多いことでしょう。でも残念ながらそれは「数学」ではなく「暗記学」です。この難問に1年生が挑戦しています。

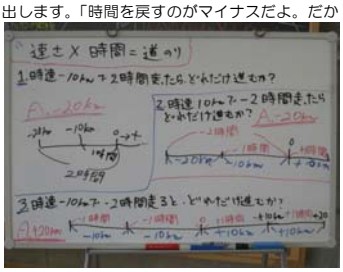
「かけ算（乗法）で計算できるものは何でしょう」という教師の問いに、右のような式が出てきました。①から④を各グループに分担して、何とか上の課題を解決しようとホワイトボードを前にしてグループ活動が始まります。

①「もとにする量」×「割合」＝「比べる量」
②「縦」×「横」＝「長方形の面積」
③「速さ」×「時間」＝「道のり」
④「１人分の個数」×「人数」＝「全体の個数」
・直径×円周率＝円周の長さ
（円周率が3.14…と正の数なので未使用）

①のグループは、値段で考えることは決まっていて、割り引きの方はマイナス、割り増しの方はプラスで考えようとしていましたが、肝心の最初の値段がマイナス、というのがイメージできません。「普通の値段が２００円なら２００円払うんだよね。そこで値札に『－２００円』って書いてあったらどうなる？」と聞くと「２００円もらうんだ。えーっ、そんなことあるの？」と、益々困っています。「もらってくれてありがとうっていうこともあるかもしれないよ。」と付け加えますが、納得いかないようなので、お小遣いで考えて、プラスならもらう、マイナスなら払う、割合の方はプラスならアップ、マイナスならダウンということにしようと提案します。「それなら分かるかも…」と取り組みだします。

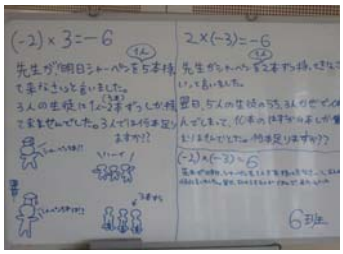
②の面積で考えようとしているグループが質問にきます。「縦が－２cmというのがありません。」そこでマイナスの長さはどんなところにあったのか尋ねると、地面の下だと言います。「地面の下にできている面積だからマイナスって考えてもいいか…」と少し明るい顔になります。別の②のグループでは数直線を用いて、「これがプラスならここから先はマイナスだ」と考えを進めています。

③のグループが最初に解決への道を見つけ出します。「速さがマイナスって…？」「後ろ向きじゃないの？」「そんな速さってあるかよ。」「だって車もバックできるよ。だいたい時速10km位はでるよ。」とかなりの熱いやりとりが見られます。このやりとりから、（－１０）×２＝－２０（20km後ろ）という結論を導き出します。「－2時間っていうことは？」と頭をひねるA君に、「ビデオの再生の逆戻りだよ。」と、彼にとってはまた意味不明のことをB君は語り出します。「時間を戻すのがマイナスだよ。だから、ビデオの逆戻しだよ。」まだピント来ないようなので、「実際に動いてみよう。」と「～秒後」と「～秒前」を確認して納得です。このグループはホワイトボードに3つの事柄を数直線を用いて表し、ノートにまとめ始めました。この式を用いている別のグループは、方向を南北にして課題を解決していました。



話の作り方に最も感動させられたのは④で考えていたグループです。彼らがつくった1問目は次の通りです。

『先生が「明日シャーペンを1人5本持ってきなさい」と言いました。（しかしその中の）3人の生徒は1人－2本（3本）しか持ってきませんでした。3人では何本足りますか？』



もちろん6本足りないので答は（－６）となります。最初に5本持ってくることが基準になっていて、そこから何本足りないかを考えるという素晴らしい設定です。しかも言葉は変ですが「…足りますか？」と、あくまでプラスを基準に問う問題になっていることにも感心させられました。

次時には、これらのことを確認してどれも同じ結果となることを知り、いつも正確に速く解くために、符号についてまとめます。今年も考えることが好きな生徒がたくさん入学してきたようです。

（牧田　秀昭）

(3)『書評[16]』で，理論を獲得するきっかけをつくる

教員は様々な雑務を抱え，多忙である。という理由も１つになるのだろうか，どうしたことかあまり本を読まない。専門書となれば尚更である。そこで平成 20 年度より，夏季休業中の職員の課題として，1 冊のお薦め本の書評を義務づけている。1 年目は負担を考えて 150 字程度だったが，2 年目以降はA4 版 1 枚とした。さらに全員分を印刷製本，配布し，グループセッションで紹介し合う機会を持つ。単に本の紹介に終わらず，自身の教育実践や体験が持ち出され，有意義な会となる。本のジャンルは，最初は様々であったが，年々本校の目指す教育観の色が出たものが増えてきている。理由の１つには，スクールリーダー（現役教員）だけでなく，ストレートマスター（新卒）も含めた大学院生の参加により，大学院で読まれている書物が持ち込まれるようになっていることが挙げられる。彼らは夏季集中講座で十分に読み込んでおり，グループセッションはお手の物である。若手の参加により大いに刺激を受けることになった。

(4) 授業研究会で第一稿[17]を読み合う

実践記録は各自が書いた原稿が即紀要原稿となるわけではない。第一稿の〆切は毎年 1 月末日で，そこから部会による推敲が始まる。まず教科を越えた授業研究部会によって読み合わせが行われる。他教科の目線は，学ぶ子どもの目線である。どんな学びが実現しているのか，どんな意味があるのか，執筆者に尋ねながら徐々に明らかにしていく。執筆者は質問に答えながら，その時々の思いや葛藤を思い出し，生徒の学びの筋だけでなく，教師の学びの筋も同時に追う。実践が授業者をどのように成長させたかも明らかにするのである。

また，教科会での読み合いも実施する。同じ教科の目線で，教科教育としての意義を明らかにする。不十分な点

は今後の課題として明らかにしておく。

この 2 種類の読み合い，推敲を経て，始めて紀要原稿として研究紀要に掲載されるのである。

(5)「なぜその教科を学ぶのか」全員が書く

本校は「Shimin Study Life（通称 SSL）[18]」という，至民中学校での学び方の解説書を発行している。教科センター方式や異学年型クラスター制，これからの学び方を生徒や保護者に分かりやすく解説した本校オリジナルのシラバスである。第 3 章は各教科編で，(0) 項は「なぜその教科を学ぶのか」が解説されている。今年度は再改訂の年であり，これまでの原稿を見直すのであるが，教員の入れ替わりも多いので，この (0) 項だけは全員が書いてみることにした。それを各教科で持ち寄り，本原稿とする。

教科の存在そのものは，現場では疑ったこともないであろう。しかしこれを生徒たちに分かりやすく説明できることが教科の指導者としての資質に繋がると考える。この問い直しは，教科に真に向き合う姿勢を育むばかりか，各単元の存在を問い直すことにも繋がり，紀要原稿に反映されることとなる。これは参考文献を挙げる教員数の増加にも表れている。

(6) カリキュラム [19] の更新

70 分授業の問題解決型学習を推進するようになって，単元全体の構成そのものを見直す必要に迫られた。平成 19 年度から，毎年カリキュラムを更新し続けている。単なる題材配列表でなく，学習課題や生徒の活動が見えるように記述する。実践して振り返り，新たなカリキュラムに更新していくサイクルは，実践記録を単なる 1 時間の授業記録から，単元全体を見通したものに変化させている。

ここまでの紀要に繋がる仕掛けを振り返ると，単に書くというだけでなく，共通項が浮かび上がる。まず，全員が記述したものを全員に印刷配布したり，共有フォルダに打ち込んだりと，常に全員の目に触れるようにしていることである。これがレベルを下げない一因となっている。次に，一度書いて終わらないことである。書いたことを元にしたグループセッションは，単に語るのではなく文字化されたものがあるだけに，上滑りに終わらない。また，2 度目以降の書き直し（推敲）の時に，もう一度自己との対話が訪れる。

さらに，読み解くことと，語り合うことが，書くことの質を上げていることが分かる。これらが実践と同時に行われていくことで，「実践と研究の一体化」が行われていくのである。

4　コミュニティからアイデンティティが育つ

指示待ち教員が多い実態がある。生徒を指導する場面では基準を示してくれないと指導できない，カリキュラムを示してくれないと授業計画が立てられない，統一テストの問題を見ないと自分で問題も作れない，隣の教室や教員も同じことをしていないと不安で仕方がない，･･･。なぜこれほどまでに自信や信念が持てないのか。いや，むしろ自信がないことそのものにも気がついていないと思われることも多々あり，こちらの方が深刻であろうか。教師としてのアイデンティティの喪失，これが教師にとって深刻な問題である。

教師の力量として青山 (2007) は，生涯学習をめざす学校づくりに視点から，①地域社会を視野に入れた経営・運営能力　②子どもの生涯を指向した実践的指導力　③地域環境に働きかける能力　④教師の共に学び合う能力　を挙げ，特に②の中で，キーワードとして「専門性」「協働性」「反省的実践性」「創造性」を挙げている [20]。また，筆者はハッカライネン講演を元に，これから求められる教師の力量として，「教師個人」と「コミュニティとしての教師集団」それぞれの，「結果としての資質能力」「関係性」「モチベーション」「創造性」を挙げた [21]。「コミュニティとしての教師集団」としての能力は，青山の挙げる④にも対応するものである。本稿で問題にしている紀要執筆，及び編集は，これらの力量がどのように培われていくかという問いに，1 つの解答を与えている。

コミュニティの中で協働的に実践を省察していく営みは，まず，コミュニティ構成員の専門性や創造性を高めて

いく。決して，専門的知識や指導技術の量（結果としての資質能力）として量られるものだけではない。何が転移するかという視点から考えれば，単に実践に著した該当単元の次年度の実践のみに反映されるわけではないことから明らかであろう。新たな単元構成力と創造性，生徒や環境との関係性，実践の意味を捉え直すことで生起する次へのモチベーションが，教師の力量として培われていくのである。

また，コミュニティの中で協働的に実践を省察していく営みは，自ずと構成員のオリジナル性を意識させる。これが，前述したように繰り返し行われていくことで質が向上し，アイデンティティが形成され，同時にコミュニティそのものも相互作用的に専門的力量を備えていくことになる。

コミュニティによる紀要の執筆，および編集は，教師個人，および教師集団の力量を培う，「協働的な反省的思考」に他ならないのである。これが紀要の存在意味であり，好条件がそろっている営みと言えよう。

逆に言うなら，オリジナル性のない，横並びの部会報告等で終わるような研究紀要なら，教師の力量形成には効力を発揮しないことになる。分業によって作業をこなしても，結局は作るだけで場合によっては読まれることもなく，労力が無駄に終わってしまう可能性がある。

5　至民中研究運営と教職大学院ＦＤの共通性

ここまで研究紀要を編集することを前提とした至民中の研究運営の実際について述べてきた。教職大学院の拠点校である至民中は，日常的に，教職大学院，特にスタッフＦＤに大いに影響を受けている[22)]。本稿の主題である至民中の研究紀要に当たるものとして，教職大学院でもスタッフ全員が毎年寄稿する『教師教育研究』が存在する。それぞれ実践研究を蓄積していくことになり，質の向上を図る確実な手段であると言える。ここで，紀要，及び論考集を編集することを中心にして，両者の関係と，研究システムが機能する要因を明らかにしていきたい。

(1) コミュニティの特質から

コミュニティの特質として，共に，同質ばかりで構成されているわけではないことが挙げられる。福井市の学校現場では最大７年を目途に異動が繰り返され，年齢的なベテランと新米だけでなく，職場経験のベテランと新米が混在する。教職大学院修了生も毎年輩出し，さらに新卒のストレートマスター院生も参加して，独特の文化を育んでいる[23)]。最近では地域の方や生徒も巻き込んだ動きが出てきている。教職大学院はさらに顕著で，研究者，実務家，企業人，それぞれに専門分野，学校種，年齢差，経験差が存在する。異動や入れ替わりを考えると，常にコミュニティが変化していることになる。

このような差異が存在し，しかも変化し続けるコミュニティにおいてビジョンを共有するには，まずは管理職や専攻長が先導し，他のメンバーが従っていくことがまず求められるであろう。しかしそれだけではコミュニティの潜在能力はいつまでも発揮できないままとなろう。各自の個性が発揮されるには，考え方や感じ方が表出するようなテーマと場を設定し，十分にビジョンを共有せねばなるまい。この営みの延長上に，紀要等の編集がある。差異を意識化しさらに共通点と展望を見出すには，紀要は最も明確な形となりうるものであり，大きな意味がある。メンバーの入れ替えのことを考えても，毎年刊行することこそ重要である。

(2)「書くこと」につながる「語ること」の重要性から

「書くこと」と「語ること」は，内容的には同じことでも，活動としては全く別物である。自由に思いつくままを表現する語りに対して，背景から展望まで論理的に言葉を紡いでいく執筆は，極めて高い完成度を要求される。心で語りながら言葉を選び，一度書いてから後もまた推敲を繰り返し，どんどん練り上げられていく。この過程で重要視されるのは，他者との対話，自己との対話であろう。至民中も教職大学院も共に大切にしていることが「書くこと」と「語ること」の密接な関係である。

至民中での紀要執筆までの支援システムは前述の通りだが，教職大学院でも同様の取組がある。まずは自身の取組を紹介する。次に，拠点校の研究紀要や修了生の長期実践報告を読み解いていく。それぞれが小グループで語ら

れる中で，単に報告そのものだけでなく，報告をきっかけにしてグループのメンバーの教育観が語られていくのである。専門分野が異なるにもかかわらず，接点を見つけ出して抽象化，一般化されていく。自身の執筆に関しても構想を述べ合う機会をとり，他者の構想を聞いている中で，新メンバーも論文の目的や構成の仕方を自然に感じ取れるような仕組みが構築されている。この営みが，自身の論考執筆に直接用いられることになる。これらはまさに至民中の紀要へのつながりと同型構造であると言えよう。

また，書くこと，語ることそのものの捉え直しが同時に行われているという特徴がある。意味を確認し合いながら進めなければ，単なる作業と変わる。

(3) 外部とのつながりから

閉じたコミュニティでは独りよがりとなり発展は望めない。紀要や論考集の刊行は，公共の場に広く活動と主張を発信・提案することになり，続けていくことそのものが意味を持つ。外部の批評の目を意識して執筆することになる。

また，紀要等の編集とは直接は無関係に見えるが，教職大学院がラウンドテーブルを組織・運営していることも，コミュニティの機能を高めることに一役買っている。外部の研究者や実践者が福井の地に定期的に集い，協議会を催すことは大変意義深いが，特に企画・運営に関わることで，毎日の実践研究を俯瞰できるようになる。

至民中でも同様のことが言え，外部に対して紀要を刊行するだけでなく，毎年公開研究会を開催している。これによって，現時点の課題は何で，どのように具体化して発信すべきか熟慮することを求められる。外部とのつながりから，自身の実践，さらには学校全体の方向性を見直し，軌道修正すると同時に，より意義を明確化していく。この営みは紀要執筆の時と同様であり，外部とのつながりの中で高次なものに変化していくのである。

ともに，コミュニティからアイデンティティを育むシステムが構築されている。至民中はこの他にも空間の活用，グループの距離感，環境の整備，テーマの設定等，教職大学院から意味あるコミュニティ形成のための多くの刺激を受けながら運営されている。拠点校として学校現場に合う形を今後も模索し続け，他校へも何らかの影響を与え続ける使命を果たしていくべきである。

6　これからの研究紀要の役割－展望と課題－

研究紀要等の存在そのものは，コミュニティの質を可視化し，外部へ発信するものであるし，編集活動は，構成員の力量形成に向けて極めて有効な営みであることを述べてきた。

毎年行うことが有効であるが，幾つかの課題がある。まず異動で構成メンバーが変更していく中，目的の共有化や書き方，進め方の手続き等が徹底しづらいことが挙げられる。一念発起して紀要の編集を始めた際，開始当初は詳細まで打ち合わせされた目的や様々な手続きの共有が，年々やりにくくなってくる現実がある。同じことでは耳障りであるし，やらなければ新メンバーがコミュニティに入っていけない。次にマンネリ化の問題である。「こんなものか」と済ませてしまっては，アイデンティティの構築は望めない。

これらの課題を打ち破るには，コミュニティでオリジナルのビジョンの共有方法を開発し続けることが必要になる。メンバーが入れ替わることをコミュニティのよさと捉えて，積極的に微修正を繰り返していく覚悟をもって継続していくのである。

至民中学校の紀要に，新しい動きがある。大学院のストレートマスターの実践は掲載されているが，異動していった教員も寄稿してきているのである。至民中で実践記録を書く意味を実感した教員による，新しい勤務先での実践記録が掲載される。中学校現場ではなかなか前例が無く，もちろんこれには現任者は大きな刺激を受ける。至民式問題解決型学習が，70 分授業の至民だけのものでなく，地域や学校種を越えて授業を動かしていくことを感じ取ることが出来る。場所は違えども，同じ志を持ったコミュニティが，研究紀要上で形成されていくのである。今後

も，本校で活躍している学校案内ボランティアの地域の方々や，卒業して活躍している社会人など，進展は不透明ながら，可能性はあるように思う。ここでも，異業種が集う福井大学大学院教育学研究科の「教師教育研究」に類似点を見いだせる。これからの紀要の在り方に新たな展望が開けてきていると感じる。

【註】

1)拙稿「授業改革を核とする学校改革－新至民中学校への軌跡－」『教師教育研究 Vol.2』福井大学大学院教育学研究科（2009)より

至民中学校の学校改革の主な取組は，しみん教育研究会著『建築が教育を変える』(鹿島出版会　2009）に紹介している。授業での改革，システムの改革，異学年型クラスターでの改革，地域とのかかわりの改革等，多岐に及ぶが，学校現場と設計者，行政，大学との協働で生まれていったプロセスが記述されている。

2)愛知教育大学附属赤崎中学校『次代を創る－学びを深め合う授業の実現から－』(2010)より

構成と分量は次の通りである。

第Ⅰ部　総論(p.1~p.15)

1　研究主題にかける願い

2　学びを深め合う授業を実現するために

3　次代を創るカリキュラムの構築

4　本研究の成果と課題

5　課題と夢

第Ⅱ部　9 教科の学習(p.16~p.169)

第Ⅲ部　ｆ－ＭＡＰ（教科の総合単元）(p.170~p.193)

第Ⅳ部　公開授業(p.194~231)

3)東京学芸大学附属竹早中学校「研究紀要第 48 号」(2010)より

構成と分量は次の通りである。

論文集(p.3~p.92)

平成 21 年度研究部活動報告(p.93~p.96)

平成 21 年度実践報告(p.97~p.146)

4)同上　小野田啓子「空間思考の育成に向けて－多面体の構造と生成可能性の研究－」(pp.21~53)

5)福井市明道中学校「平成 21 年度研究紀要第 50 号」(2010)より

構成と分量は次の通りである。

Ⅰ　研究の概要(p.1~p.4)

Ⅱ　各部会の実践

1　学力づくり部会(p.5~p.106)

2　心づくり部会(p.107~p.122)

3　小中連携・中学校区教育(p.123~p.127)

6)福井市進明中学校「平成 21 年度　わが進明」(2010)より

構成と分量は次の通りである。

Ⅰ　研究全体のあゆみ(p.1~p.6)

Ⅱ　各部会のあゆみ

1　学習指導研究部(p.7~p.36)

2　総合学習研究部(p.37~p.40)

3　学校風土研究部(p.41~p.50)

Ⅲ　中学校区教育(p.51~p.52)

7)福井大学教育地域科学部附属中学校研究紀要第 38 号『学びを拓く探究するコミュニティ』(2010)より

8)福井市教育委員会が平成 17 年度からはじめた，保育園，幼稚園，小学校，中学校が連携して，学校，地域，保護者とともに教育を進めていくという施策。子どもたちの入進学における抵抗感の解消，教員の指導力の向上，学校教育に対する保護者や地域住民の理解の深まり等，様々な成果が生まれている。詳細は「平成 22 年度福井市学校教育方針」（福井市教育委員会)。

9)福井市至民中学校研究紀要　2004~2009

通し番号はつけられていない。タイトルは全てその時の研究主題となっている。

10）運営部会は全職員がいずれかに所属する，その年度で最も力点を置きたい生徒活動を支援，運営する部会である。A，B，Cの3部会が組織され，この年度は「Cタイム（本校オリジナルの総合的な学習の時間）運営」「生徒諸活動」「地域連携」である，毎年微修正しながら進めていっている。

11）山下忠五郎「発刊にあたって」『研究紀要 2008 学びと生活の融合』より

『これは，これからの中学校教育の在り様を求めてやまない教師集団の挑戦の履歴であり新生至民中教育の発信の履歴である。私たちの履歴は，中学校教育の未来を切り拓く「初めの一歩」にしか過ぎないのであり，年を重ねる回数と同じだけ乗り越えていくことをここに誓うものである。教師集団の熱い思いと至民中教育の実践が必ずや中学校教育の改革を実現させるものと信じてやまないのである。挑戦し続ける至民中学校であることの証として，この研究紀要を発刊する。』

12）ペンティ・ハッカライネン　フィンランド，オウル大学副学長。教師教育学部教授。平成21年10月24日の至民中学校公開研究会及び国際フォーラムで，演題「フィンランドの教育，そしてナラティブな学習」で講演。

13）拙稿「実践記録読み合わせに関して」『平成17年度研究紀要』より

1時間の記録でなく，問題解決型学習のひとまとまりを
「案」でなく「実際」を
「教師が何をしたか」でなく「生徒が時系列でどのように学んでいったか」を
「抽象論」でなく「具体的な学び」を
「一般論」でなく「ある学級，ある生徒」を
「結果」だけでなく「過程」を

14）参観記録の具体的内容については，拙稿「参観記録，実践記録を柱にした授業コミュニケーション」『教師の言葉とコミュニケーション』（秋田喜代美編，2010）に詳しい。

15）運営部会の各部長3名，授業研究部会長3名，管理職2名，教務，研究主任の計10名で構成している。教職大学院拠点校であることから担当の大学教官や，福井市特別研究指定校であることから担当指導主事も適宜加わる。機能性に富み，管理職も加わった，運営・研究の決定機関である。

16）『書評　2010夏』に紹介された書籍は次の通りである。尚，数字は同書を挙げた人数である。

Ｅ．ウェンガー他『コミュニティ・オブ・プラクティス』翔泳社(2002)②
Ｄ・Ａ・ショーン『「省察的実践とは何か」プロフェッショナルの行為と思考』鳳書房(2007)
Ｄ．Ｓ・ライチェン　Ｌ・Ｈ・サルガニク『キー・コンピテンシー』明石書店(2003)
Ｇ・クラーク『なぜ日本の教育は変わらないのですか』東洋経済新報社(2003)
Ｋ・Ｓ・シュナイダー『学力は感覚教育で飛躍的に伸びる』河出書房新社(2009)
伊那市立伊那小学校『学ぶ力を育てる』明治図書(1926)
上野一彦・市川宏伸『図解　よくわかる大人のアスペルガー症候群』ナツメ社(2010)
大村はま『日本の教師に伝えたいこと』筑摩書房(1995)②
大村はま『教室に魅力を』国土社(2005)
荻野達史他　編著『「ひきこもり」への社会学的アプローチ』ミネルヴァ書房(2009)
蔭山英男『学力の新しいルール』文藝春秋(2005)
金森俊郎『日本の教師に伝えたいこと』角川書店(2003)
小塩隆士『教育を経済で考える』日本評論社(2003)
齋藤孝『教育力』岩波新書(2007)②
佐伯胖　藤田英典　佐藤学編著『学びへの誘い』東京大学出版会(1995)
坂根健二『教師ほど素敵な仕事とはない！』北大路出版(2009)
佐藤学『教師花伝書－専門家として成長するために－』小学館(2009)②
佐藤学・今井康雄編『子どもたちの想像力を育む　アート教育の思想と実践』東京大学出版社(2003)
志水広吉『公立小学校の挑戦－「力のある学校」とは何か』岩波ブックレット611(2003)
千葉市立打瀬小学校編著『21世紀の学校はこうなる』国土社(1998)
外山滋比呂『思考の生理学』ちくま文庫(2009)
野口芳宏『野口流　授業の作法』学陽書房(2008)
原田隆史『いま，子どもたちに伝えたいこと』ウエッジ(2010)
古田敦也『「優柔不断」のすすめ』ＰＨＰ(2010)
吉田脩二『思春期・こころの病－その病理を読み解く－』高文研(1991)
和田義信編著『教育学研究全集　第13巻　考えることの教育』第一法規(1977)

17) 毎年印刷・配布しているが，次の文章は本年度第一稿の表紙に書いたものである。毎年，実践を書く意味と読み合わせの意味を確認している。

平成22年度　実践記録　第一稿

例年同様，1月末日現在での，平成22年度実践記録です。1時間の授業記録ではなく，問題解決型学習のひとまとまりの中での，生徒たちの学びの道筋を著したものです。教師の手立ての羅列でなく，実際に生徒が，与えられた課題からどのような「問題」を見出し，どのように解決していったかを明らかにする記録です。

教科センター方式3年目となり，この方式が定着して，より充実した実践に深化しているかもしれませんし，よりチャレンジングな実践が見られるかもしれません。授業を通して生徒も教師も（また，他の立場の人も），どのような成長が見られるでしょうか。

今から1ヶ月間，授業研究部会と教科部会での読み合わせの中で，実践の意味を問い直し，主張や課題を明確にして紀要原稿へと高めていきたいと考えています。また，異動していった先生方や，院生の方々の実践も寄稿いただいています。こうして出来上がる紀要は，新たな意味を持つものになりそうです。

平成17年度から本校に勤務の先生方にとっては，もう6本目です。これは先生方オリジナルの，言わば「名刺代わり」のようなものです。長い年月を通しての，先生方ご自身の成長の跡もぜひ発見して下さい。

18) 「Shimin Study Life」第 1 版は 2008 年 3 月，改訂版は 2009 年 3 月に発行される。第 1 版は全校生徒，第 2 版以降は新入生に配布され，学年当初のガイダンスだけでなく，3 年間持ち上がり，折に触れて取り扱う。夏季休業では，学年に合わせた読後感想が全校生徒の課題となっている。

19) 本校のカリキュラムの考え方は，拙稿「授業改革を核とする学校改革」『教師教育研究 Vol.2』福井大学大学院教育学研究科，2009，p.12　に詳しい。

20) 青山庸『生涯学習をめざす 21 世紀の「協働的学校」づくり』東洋館出版社　2007 pp.202~209

21)拙稿「ハッカライネン講演と至民中実践研究」『教師教育研究 Vol.3』福井大学大学院教育学研究科，2010

22)至民中は教職大学院拠点校で，毎年，現職教員がスクールリーダー院生となっていたり，学部を卒業したストレートマスター院生が，長期インターンシップに本校に通っている。研究会等には至民中に大学院スタッフが訪れて，指導，助言，協働研究を進めている。また筆者は教職大学院非常勤講師であり，毎週のＦＤに参加している。このように，大変密接な関係を築いている。

23) 拙稿「教職大学院拠点校における世代を越えた学び合い」『教員の需給変動と「質保障」』日本教師教育学会年報第 18 号，学事出版，2009